冠状動脈瘤を残さなかった川崎病既往患者の予後

加藤裕久、井上　治、杉村　徹

要約：当科で経過観察している川崎病既往患者のうち、急性期以降に冠状動脈瘤を残さなかった患者の遠隔期予後（異常所見の有無）について検討した。対象は1973年から1987年までに経験した冠状動脈瘤を残さなかった川崎病患者888例のうち最近２年間まで経過観察できた473例を対象とした。これらの例のうち外来レベルの検診（診察、心電図、心エコー図）で異常を認めた例はいなかった。血清脂質の検討では稀ではあるが、異常値を呈する例が存在した。

見出し語：川崎病、冠状動脈正常、遠隔期予後、血清脂質

【研究目的】

川崎病既往患者を長期にわたり経過観察していく場合、冠状動脈瘤を残さなかった例の管理は各施設独自の考えで行われている。実際これらの既往患者で学童心臓病管理指導表の管理不要となっている例、３Ｅ可の管理をされている例が混在している。われわれの施設では原則として管理不要とはせずに１～２年ごとの経過観察を行っている。

そこで発症から３年以上経過しているこれらの既往患者について外来レベルでの異常所見の有無について検討した。

【対象と方法】

1973年から1987年までに経験した川崎病患者のうち急性期以後に冠状動脈後遺症を残さなかった888例を対象とし、これらのうち最近２年以内に外来を受診した473例について聴診、心電図、胸部レントゲン写真、断層心エコー図および一部の例で血清脂質、トレッドミルによる運動負荷試験での異常所見の有無を検討した。

【結果】

対象例のうち定期的に検診しているのは473例（53.3％）であった。これらの例で聴診、心電図、胸部レントゲン写真、断層心エコー図といった外来レベルの検査にて、明らかな川崎病由来と考えられる異常所見を認めた例はいなかった。胸痛などの訴えにより、28例でトレッドミル運動負荷試

久留米大学医学部小児科；Department of Pediatrics, Kurume University School of Medicine.

験を行ったが正常であった。また、繰り返す胸痛があり、家族の希望により1例に冠状動脈造影を行ったが正常であった。年長児において血清総コレステロール、HDL－コレステロール、中性脂肪などの血清脂質について検討した。血清脂質は概ね正常であったが、血清総コレステロール値が200mg／dl以上の例が2例、動脈硬化指数が3.0以上の例が1例存在した。

【考察】

川崎病既往患者を長期管理していく場合、特に急性期から冠状動脈病変を伴わなかった例について、いつまで検診を行わないといけないのか、その間隔はどのくらいが適当なのかといった点はまだコンセンサスが得られていない。実際に管理不要となった既往例も存在する。

われわれの施設では従来より表1に示すような検診計画でこれら既往例を管理している。今回これらの例について検討したが、約半数の例は経過観察から脱落していた。最近まで経過観察できている例で、外来レベルの検査にての異常所見の有無を検討したが、明らかに川崎病由来と考えられる異常所見を示した例はいなかった。

また、川崎病後遺症例の遠隔期の冠状動脈造影時に冠血管拡張薬であるイソソルビド・ディナイトレイト（ISDN、ニトロール）を冠状動脈内に注入し、冠状動脈の拡張性についての検討では表2に示すように、冠状動脈病変が残っている部分では拡張能が低下しているが、急性期より冠状動脈病変を認めなかった部位ではコントロールと差は認めず血管壁の反応は少なくとも発症から冠状動脈造影までの期間（4.3±3.5年）は正常にたもたれていた。

すなわち、後遺症を伴わなかった川崎病は少なくとも児童、生徒の時期に異常が出現することはないと考えられる。しかし、川崎病の血管炎が成人の動脈硬化の危険因子となる可能性は残されており、われわれの血清脂質の検討でも頻度は少ないが異常を示す例が存在する。したがって、川崎病の既往患者は管理不要とすることなく、その施設に見合った頻度で経過観察することが必要と考えられる。

表１　冠状動脈障害がなかった川崎病既往児の検診

発症２ヵ月：一般検血、炎症反応、心電図、胸部レントゲン、心エコー図
↓
発症５ヵ月：心電図、心エコー図、（胸部レントゲン）
↓
発症１年：　心電図、心エコー図、胸部レントゲン
↓
以後小学校入学前まで１年毎に心電図、心エコー図、（胸部レントゲン）
学童期以降は２年毎に心電図、心エコー図、（胸部レントゲン）
必要に応じて運動負荷試験を行う。
小学校高学年以降は血清脂質を測定する。

表２　ISDN負荷による冠状動脈拡張率

	拡張率	
コントロール　(n:14)	13.5±10.9%	※
川崎病		
冠状動脈正常（n:27）	14.4±11.3%	※
冠状動脈異常（n:18）	5.5± 6.2%	

※：$p<0.05$

コントロール:心室中隔欠損症，肺動脈弁狭窄症

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:当科で経過観察している川崎病既往患者のうち、急性期以降に冠状動脈瘤を残さなかった患者の遠隔期予後(異常所見の有無)について検討した。対象は1973年から1987年までに経験した冠状動脈瘤を残さなかった川崎病患者888例のうち最近2年間まで経過観察できた473例を対象とした。これらの例のうち外来レベルの検診(診察、心電図、心エコー図)で異常を認めた例はいなかった。血清脂質の検討では稀ではあるが、異常値を呈する例が存在した。